

財団だより

〈第49号〉

特別号

財団法人 全国強制抑留者協会
〒102-0073 東京都千代田区九段北1-8-2
九段第二勲業ビル2階
TEL 03-3261-6565 FAX 03-3261-6548

シベリア抑留関係者の皆様へ

◆慰霊訪問(墓参)参加案内◆

財団法人 全国強制抑留者協会

会長 相沢 英之

平成二十五年度旧ソ連領並びにモンゴル領慰霊訪問(墓参)を例年通り、次頁の要領により実施致します。

先の大戦が終結して本年八月で六十八年が経過します。当協会が実施の慰霊訪問も平成二年以降回を重ね本年で二十四回を数え、昨年までに二、〇二二名の方が参加されております。

顧みますと、あの譬えようのない酷寒、飢餓の荒野に、不法にも拉致抑留され、苛酷なノルマによる重労働を強いられ、悲

にご遺族の皆様方と共に現地を訪れ、ご冥福を祈らずにはおられません。

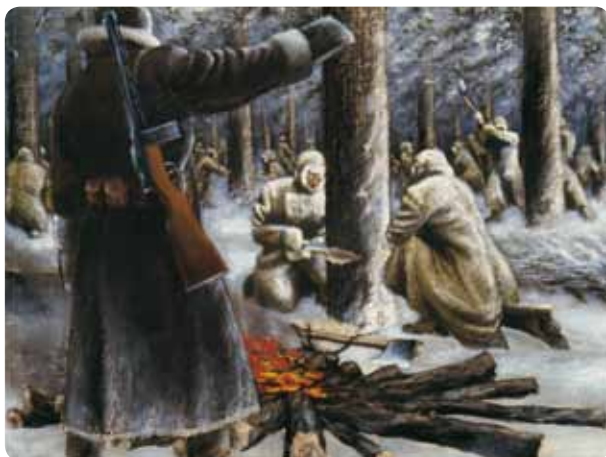
年々現地を訪れる方の数も減ってまいりました。政府による、ご遺骨の収集、又現地における慰霊碑の建設等、可及的速やかな実施により、心から戦後が終わったと言える日が一日も早く来るよう念願して居ります。

その日が来るまで万難を排して関係者の皆様と現地への墓参を続けなければならぬと考えております。

惨な生き地獄を体験しながら、一途に祖国の地を踏み最愛の家族に会える日を夢見て耐えに耐えた生活の中、遂に祖国の土を踏む事なく、無念の死を遂げられ今なお荒野に眠る三六、〇〇〇有余の戦友を思うとき、万感交々胸に迫ってまいります。

生還した戦友並び

伐 採



慰霊訪問 (ハバロフスク地区ピロビジャン)



シベリア抑留関係者の皆さまへ

平成25年度旧ソ連領並びにモンゴル領慰霊訪問(墓参)を実施致します。

主な訪問予定地

① 沿海地方	Aコース	ウラジオストク ウスリースク アルセーネフ
	Bコース	ウラジオストク ナホトカ パルチザンスク
	Cコース	ウラジオストク ウスリースク アルセーネフ ナホトカ パルチザンスク
② ハバロフスク地方	Aコース	ハバロフスク ホール コムソモリスク
	Bコース	ハバロフスク ビロビジャン イズベストコーヴァヤ クリドゥール
③ アムール州		ブラゴベシンスク ライチヒンスク プレヤ ペロゴルスク
④ チタ州		チタ ハラゲン ヒロク ジプヘーゲン ハハトイ
⑤ イルクーツク州		イルクーツク タイシェット チュナ クヴイトーク チェレンホボ
⑥ クラスノヤルスク地方		クラスノヤルスク アバカン ミヌシンスク
⑦ カザフスタン共和国		アルマトゥイ カラガンダ
⑧ ウズベキスタン共和国		タシケント アングレネン コーカンド
⑨ モンゴル		ウランバートル ダンバルダルジャー

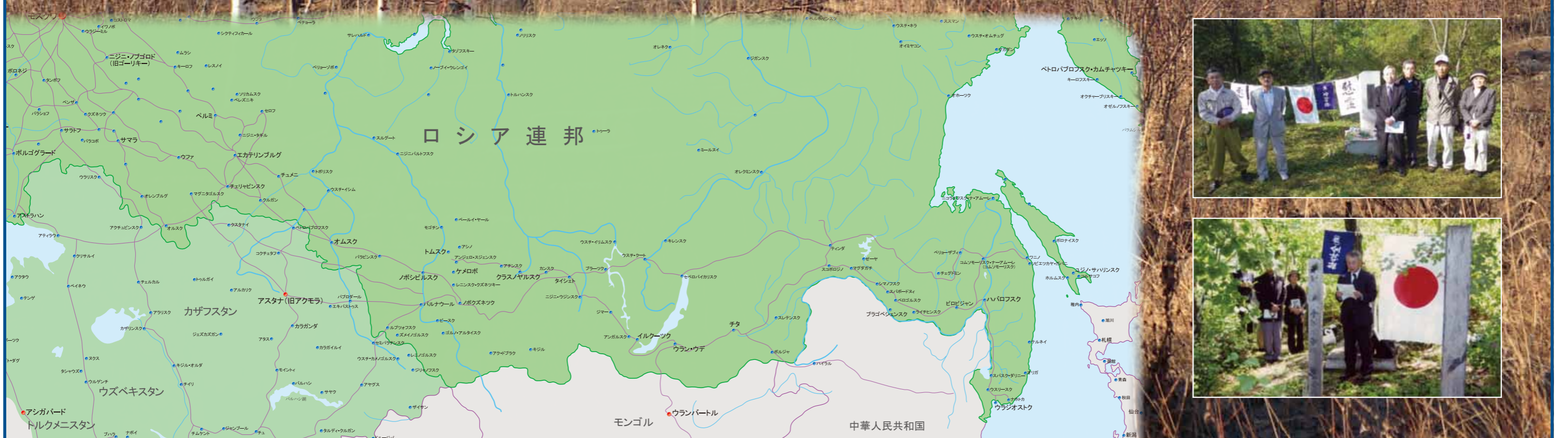
実施概要

- **参加条件**：ご参加は原則として訪問地域に抑留された方ですが、ご家族・ご遺族の方でもご参加いただけます。
 - **構成**：訪問希望地により班(10名程度)を編成致します。(催行人員は、6名以上の参加者により実施致します。)
 - **実施期間**：平成25年8月中旬～8月下旬の間(予定)
※訪問日程は、訪問地・班編成により異なります。(3泊4日より7泊8日の範囲です。)
 - **申込締切**：平成25年6月17日(月曜日)
- 主催**：財団法人 全国強制抑留者協会
後援：総務省大臣官房総務課管理室

申込先

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-8-2
財団法人 全国強制抑留者協会
☎03-3261-6565

※参加ご希望の方は、訪問希望地・住所・氏名・電話番号を明記の上ハガキにて左記へお申込み下さい。



Верните самураю его меч

サムライに刀を返せ!

第1回

『グラーグ(ソ連強制収容所)の真実』

相沢会長が、2012年9月「日露交流シンポジウム」でモスクワ入りした際、地元紙「ノーヴァヤ・ガゼータ*」のインタビュー取材を受けました。

「ノーヴァヤ・ガゼータ」紙は、エリツィン基金とゴルバチョフ基金から後援を得、「グラーグ(ソ連強制収容所)の真実」という特集記事を数年にわたり連載しています。

2013年1月16日発行第4号掲載の特集に「サムライに刀を返せ!」という見出しで、このインタビュー記事が掲載されました。続く「外国の代理人たち」という見出し記事とともに、その意識をご紹介します。



写真:アンナ・アルチョミエワ/ノーヴァヤ・ガゼータ紙

*1993年創刊、週3回発行、発行部数約50万部のロシアのタブロイド新聞。ソ連最後の最高指導者ゴルバチョフ氏が株主であり、プーチン政権に対する批判的論陣で知られる。アンナ・ポリコフスカヤ記者をはじめ、2001年～2009年の間に所属ジャーナリスト4名が殺害されたことも有名。

「ソ連軍が突如として国境を越え侵入し、その一週間後、われわれが駐屯していた街に部隊が入ってきた。

どうせソ連側に、武器、弾薬、被服を引き渡してしまうなら、一般の民間人にくれてやったほうがましだということで、司令部の窓から朝鮮人たちに被服や軍靴を投げてやった。」

「貨物船に乗せられたのは11月であった。異臭が漂う船倉にギッシリ詰め込まれたわれわれは、まともに眠ることもできなかった。

「ダモイ・ヴイポーニュ」(日本へ帰国だ)と言われるまま信じた。

三日目の朝、湾内にソ連の軍艦を何隻も目にし「ダモイ」(帰国)はやはり嘘だったとわかった。

我々はクラスキーノの天幕張りの収容所へ連行された。」…

「我々は貨物列車に詰め込まれた。何故あの時に脱走をしなかったのか、今思えば本当に不思議なくらいである。しかし、脱走はとても不可能だったし、そんな勇気はもてなかった。

酷寒だった。エラブガまでの「死の行軍」で何人

か凍死した仲間がいた。また凍傷で手や足の指を失った者はいくらでもいた。

ソ連の囚人列車と隣り合って停車したことがあった。我々は窓から顔を出している囚人にたどたどしいロシア語で聞いた。「どんな罪を犯したんだ?」が質問の趣旨であったが、驚いたことに囚人の一人は、「20ルーブル盗んで、シベリア送り15年の懲役だ。」と答えた。」

「23日間の長旅の果て、我々が降ろされたのはキズネルという田舎の寒駅であった。その夜のうちに行軍が始まった。いたるところ白い雪で覆われ、どこが道かもわからなかった。私は父、母、姉妹のことを思い浮かべた。みんなどうしているだろう。不運にも捕虜という汚名を着せられて、トボトボどこへ行くとも知れない旅路を続けている。これが戦争というものなのか。しかし、それは苦悩の終わりではなく、まさに始まりであった。行軍の三日目には、吹雪が特にきつくなり、年取った者、身体の具合の悪い者などが落伍し始めた。道端に倒れたまま起き上がれず、「放っておいてくれ、寝かせてくれ…」と言うのだった。」